

教員氏名：大屋 陽祐（保育学科／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

保育学科に所属し、教員免許および保育士資格の取得に必要な科目を担当している。主な担当科目は、教育相談・子育て支援、社会福祉、保育内容「人間関係」の指導法、保育実習関連科目、キャリア形成支援科目である。また、2年生を対象とした専門ゼミを担当し、学生が主体的に学びを深めるとともに、学外での子育て支援活動を実践的に行っている。

このほか、東日本栄養医薬専門学校では栄養士養成課程における社会福祉科目の非常勤講師を務めている。また、育英大学では子育て支援および発達障害に関する科目を担当した経験を有する。

教育・研究活動に加え、群馬県社会福祉評価機構に所属し、社会的養護施設第三者評価事業の評価員として施設の質の向上に携わっている。また、東京都保育士等キャリアアップ研修および伊勢崎市保育協会新任研修では講師を務め、現職保育者の資質向上にも取り組んでいる。

スポーツ分野では、群馬県バレーボール協会強化委員会副委員長として競技力向上に取り組むとともに、本学女子バレーボール部（育英大学・育英短期大学）の監督を務めている。チームは関東大学女子バレーボールリーグ3部に所属し、全日本6人制女子クラブカップでは最高ベスト16の成績を収めている。また、全国私立短期大学協会主催の全国私立短期大学スポーツ大会では、開会式役員およびバレーボール競技役員を務めた経験を有する。さらに、令和8年度からは群馬県「湯けむり国スポ」に向けた成年女子バレーボールチーム「GuTS」のマネージャーを務め、競技力向上と選手育成に携わっている。

現在の主な担当科目一覧	
育英短期大学	幼児理解と教育相談、社会福祉、保育内容「人間関係」指導法、保育実習Ⅲ、保育実習指導Ⅲ、キャリアデザインⅢ、キャリアデザインⅠ、キャリアデザインⅢ、保育教職実践演習、専門ゼミⅠ、専門ゼミⅡ
東日本医薬専門学校	社会福祉
主な学外活動	

育英大学・短期大学女子バレーボール部（監督）
 群馬県バレーボール協会強化委員会（副委員長）
 群馬県社会福祉評価機構（第三者委員）
 東京都保育士等キャリアアップ研修 障害児保育講師担当
 群馬県伊勢崎市新任研修講師担当
 地域における保育園、認定こども園における保育コンサルティング

2. 教育の理念（なぜやっているか）

【専門分野を研究する者としての理念とその背景や経験】

私は、児童学を基盤として、子育て支援、障害児支援及びインクルーシブ保育を主な研究領域としている。研究に当たっては、保育現場で生じる課題を的確に捉え、その課題の解決につながる実践的な知見を明らかにし、保育の質の向上に寄与することを理念としている。

社会福祉士及び精神保健福祉士の資格を有していることから、特に子育て支援における相談支援に重点を置き、保護者や子どもの多様なニーズに寄り添う支援の在り方について調査・実践・研究を重ねてきた。また、子育て支援活動や社会的養護施設第三者評価事業、保育者研修等を通して得られた実践的知見を研究へ反映するとともに、研究成果を保育現場や地域社会へ還元することを大切にしている。

今後も、保育・福祉・教育の各分野を横断する視点を持ちながら、子どもと保護者が安心して生活できる地域社会の実現に寄与する研究を推進するとともに、保育現場の実践に資する研究成果を継続的に発信していきたい。

【学生の学びに対する理念】

私が担当する科目は、教育相談・子育て支援、社会福祉、保育内容「人間関係」の指導法、実習関連科目など、保育者として必要な専門的知識と実践力を養う内容である。

近年、保育者には子どもの保育だけでなく、保護者への相談支援、多職種との連携、障害や発達に配慮した保育の実践など、多様で高度な専門性が求められている。そのため、授業では理論や制度を理解するだけではなく、事例検討、グループワーク、ロールプレイ等を取り入れ、学生が実際の保育場面を想定しながら主体的に考え、判断し、行動する力

を養うことを重視している。

また、地域での子育て支援活動、社会的養護施設第三者評価事業、保育者研修等で得られた実践的知見を授業へ積極的に取り入れ、理論と実践を往還する学びを実現することを目指している。学生一人ひとりが子どもや保護者の思いに寄り添い、多様な価値観を尊重しながら、専門的知識と根拠に基づいて支援を考え、他者と協働しながら実践できる保育者へ成長することを教育の目標としている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

教育理念として掲げる「理論と実践を往還する学び」と「学生一人ひとりの多様性を尊重した教育」を実現するため、学生の主体的な学びを促す授業設計と、個々の学習状況に応じたきめ細かな学習支援を行っている。

まず、学生一人ひとりの理解度や学習進度、学習特性には個人差があることを踏まえ、全ての担当科目において教科書・参考書に沿ったレジュメを毎回作成・配布している。また、授業ではパワーポイントを活用し、図表、写真、動画等の視覚教材を積極的に取り入れることで、学生が内容を具体的にイメージしながら理解を深められるよう工夫している。さらに、授業資料は復習や実習、国家試験対策にも活用できるよう体系的に整理し、継続的な学習を支援している。

また、障害のある学生や特別な配慮を必要とする学生に対しては、個々の教育的ニーズに応じた合理的配慮を実践している。例えば、限局性学習症（SLD）のある学生には、授業資料の全ての漢字に振り仮名を付した資料を作成・配布するなど、誰もが安心して学ぶことのできるインクルーシブな学習環境づくりに努めている。

授業では、知識を一方向的に伝達するだけでなく、学生が主体的に考え、対話しながら学ぶアクティブ・ラーニングを重視している。「幼児理解と教育相談」では、保育現場で起こり得る相談事例や支援事例を活用したケーススタディや事例検討を取り入れ、理論や制度を実際の支援へどのように生かすかを考察する機会を設けている。また、「保育内容『人間関係』の指導法」では、グループワークや演習を通して子ども同士や保育者との関わりを多面的に捉え、援助方法について主体的に考察できる授業を展開している。

「保育実習指導」では、学生が希望する実習施設について主体的に調査・分析し、プレゼンテーションを行うことで、施設の役割や専門性への理解を深めるとともに、学生同士

が学びを共有する機会を設けている。また、専門ゼミでは、学生が自ら課題を設定し、文献研究や調査、地域における子育て支援活動等を通して探究的に学ぶことを重視している。これらの学びを通して、自ら課題を発見し、多面的に考察し、他者と協働しながら解決策を考える力を育成している。

さらに、地域における子育て支援活動、社会的養護施設第三者評価事業及び保育者研修等で得られた実践的知見を授業へ積極的に取り入れ、理論と実践を往還する学びを重視している。現場で実際に生じている課題や支援事例を教材化することで、学生は理論と現場を結び付けながら保育者として必要な専門性を身に付けることができる。

授業外においても、授業終了後やオフィスアワー等を活用した個別指導を行い、学習内容に関する質問への対応や実習・進路に関する相談など、学生一人ひとりの状況に応じた学修支援を継続的に実施している。このように、授業内外を通じて学生の主体的な学びを支え、多様な子どもや保護者に寄り添うことのできる保育者の養成を目指している。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

学生による授業評価では、全ての担当科目において学科平均を上回る評価を得ている。特に、「授業が分かりやすい」「授業資料が学習に役立つ」「具体例や事例を交えた説明により理解しやすい」といった項目について高い評価を受けている。パワーポイントを活用した視覚教材や毎回配布しているレジュメは、授業中の理解だけでなく復習や試験対策にも活用されており、学生の主体的な学習を支える教材となっている。

授業では事例検討やグループワーク、プレゼンテーション等を取り入れているが、「幼児理解と教育相談」では学生が理論や制度を支援場面へ結び付けて考える力を養い、「保育実習指導」では施設理解を深めた上で実習に臨む姿勢が見られるなど、実践力の向上につながっている。

また、専門ゼミでは地域の児童館と連携し、ハンドアートやパラバルーンを取り入れた子育て支援活動を継続的に実践している。学生は授業で学んだ保育理論や子育て支援の知識を実際の親子との関わりの中で活用し、活動後には振り返りを行うことで、理論と実践を往還する学びを深めている。参加した利用家庭からは活動内容について肯定的な意見が寄せられており、地域との継続的な連携にもつながっている。

さらに、授業評価アンケートや学生との面談を通して得られた意見を授業改善へ反映し、

教材や授業方法の見直しを継続的に行っている。このような PDCA サイクルを通して教育の質の向上を図るとともに、学生が主体的に学び、保育現場で実践できる力を身に付けられる教育を目指している。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

【長期目標】

短期大学は2年間という限られた修学期間であるが、その中で学生が専門的知識と実践力を身に付け、卒業後も保育者として成長し続ける基盤を築くことが重要であると考えている。そのため、子どもの保育だけでなく、保護者への相談支援、多職種との連携、地域との協働など、現代の保育者に求められる幅広い専門性を育成する教育を推進したい。また、保育者不足や離職率の高さが課題となる中、保育現場で長く活躍し続けることのできる保育者の養成を目指している。そのためには、知識や技術の修得だけではなく、保育の魅力や社会的意義を実感し、自ら学び続けようとする姿勢を育むことが重要である。今後、理論と実践を往還する教育を基盤としながら、地域との連携をさらに深め、学生が実践を通して学び続ける教育環境を充実させていきたい。

さらに、研究テーマであるインクルーシブ保育の理念を教育へ積極的に取り入れ、多様な子どもや家庭を理解し、一人ひとりの違いを尊重しながら保育を実践できる保育者の養成を目指したい。地域の子育て支援活動や保育現場との連携を通して、学生が多様な子どもや保護者と直接関わる経験を積み、実践の中で学びを深められる教育を継続・発展させていきたい。

【中期目標】

入学する学生の学習歴や価値観、学習特性が多様化する中、学生一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援を一層充実させるとともに、インクルーシブな学習環境の整備を継続していきたい。また、ICTの活用やアクティブ・ラーニングの充実を図り、学生が主体的に学び、考え、協働する授業づくりを推進していく。

教育内容については、地域での子育て支援活動や保育現場との連携をさらに発展させ、学生が授業で学んだ理論を実践の場で検証し、その経験を再び授業で振り返る「理論と実践を往還する学び」を一層充実させたい。専門ゼミにおいても、地域の児童館等と連携し

た子育て支援活動を継続・発展させ、学生が主体的に企画・運営・振り返りを行う探究的な学びを推進していく。また、保育者として必要な専門性だけでなく、社会人としての責任感や倫理観、コミュニケーション能力、課題解決能力を育むキャリア教育の充実にも取り組みたい。学生が「保育は楽しい」「子どもや保護者のために働きたい」と実感できる学びを提供することで、保育者としての使命感と自己効力感を育み、保育現場へ意欲を持って送り出すことを目標としている。

今後も、研究・教育・地域貢献を相互に結び付けながら、インクルーシブ保育の理念を教育実践へ発展させ、多様な子どもや家庭に寄り添い、地域社会から信頼される保育者の養成に取り組んでいきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

1 授業で使用しているスライドサンプル

(2026年6月30日現在)